

戦後の武道教育についての研究 —学校における武道の取り扱いに着目して—

A study on post-war martial arts education in Japan : Focusing on how martial arts is handled in schools

久保 優樹, 武井 幸二, 岸本 卓也

Yuki KUBO, Koji TAKEI and Takuya KISHIMOTO

Abstract

The purpose of this research was to ascertain how martial arts were handled in Japanese schools and how they became compulsory after World War II.

Martial arts education was banned by the Allied Powers' General Headquarters after World War II. It later resumed once Judo and Kendo were emphasized as "sports." In 1958, a new term—combat sports—was being used. At the time, "combat sports" were linked to moral education, so combat sports flourished when school hours were extended. In 1989, the emphasis was shifted back to "traditional culture," and "combat sports" were once again renamed "martial arts." Martial arts ceased being a sport in physical education and instead became part of traditional culture. Amendment of the Basic Act on Education resulted in "respect for traditional culture" and "regionalism" that in turn led to martial arts becoming a compulsory subject in Japanese schools.

Key words; martial arts education, sports, combat sports, traditional culture

I. はじめに

平成24年度から中学校において、それまで選択制として取り扱われてきた「武道」と「ダンス」が必修化された。武道とダンスは、どのような理由から必修化へと結びついたのであろうか。渡邊は二つの点を指摘している。一点目は、制度上の

問題として現行の学習指導要領では「武道」や「ダンス」の学習経験がないままに、「武道」か「ダンス」のどちらか選択させていること¹⁾。二点目は、「武道」が「改正教育基本法で規定された教育の目標である『我が国の伝統と文化を尊重する態度を養う』上でも大変有効である」²⁾ことを指摘している。また、石田は「武道」が必修化され

た背景について「教育基本法の大枠には、『愛国心』あるいは『我が国の伝統・文化』の強調がある」³⁾とし「これを一つの背景に、中学校1、2年生の武道が必修になってきた」⁴⁾と述べている。このようなことから、武道の必修化は、制度上の問題と教育基本法の改正などが影響し、武道の必修化へとつながった。

戦後、学校における武道教育を導入するにあたっては、多くの議論がなされてきた。武道場の施設や設備のこと、指導者養成などの条件整備の問題点が指摘されている⁵⁾。その他にも、石田は「武道に付与された『我が国固有の』だとか、『伝統的な行動の仕方』という表現」⁶⁾が問題であるとし、「武道にどのような役割を期待しているのか」、「武道で何を教えるのかが不明」⁷⁾であることなどが指摘されている。さらに、柔道の事故による安全性の問題もあろう。

そこで、本研究では戦後の学校における武道の取り扱いに着目し、どのような経緯によって武道が取り入れられ、学習指導要領において扱われてきたのかについて明らかにすることを目的とする。

Ⅱ. 学校における柔道・剣道の復活

戦後、我が国の教育は占領軍によって国家主義や軍国主義が払拭され、民主主義教育へと大きく転換されることになった。学校体育では、軍事教練の廃止や武道の禁止措置など、さまざまな面で軍事色が一掃された。特に「武道」は、「終戦二伴フ体錬科教授要項（目）取扱ニ関スル件」⁸⁾が出されたことにより授業が中止され、その後、課外活動も一切禁止された。

戦後、学校体育の新たな基本方針を示したのは「学校体育指導要綱」であった。要綱は、「国家主義、軍国主義の一掃、封建的人間関係の打破、訓練主義的体育方法の一掃という問題」と「学校体育カリキュラム樹立のための基本方針、民主教育のための体育目標の設定、それにたいする運動の

示唆と、それらの運動選択の基準、さらに、体育の方法の科学科など」⁹⁾の問題を解決するための方針として示された。

戦後、新たに「武道」が復活するのは、昭和22年の『学校体育指導要綱』陸上競技の領域に「すもう」が示されてからであった。しかし、戦前の武道教育は、柔道と剣道が中心であり、すもうは「武道」の領域として扱われていなかった。

柔道が復活したのは昭和25年からであった。「武道」の復活要請は、県体育教育当局、元柔道・剣道団体、国会議員など数多くの所から民政情報教育局（CIE）に要請されたことが指摘されている¹⁰⁾。このような地道な復活要請が、「武道」の復活に影響を及ぼした。柔道の復活に際して文部省は、以下のことを示した¹¹⁾。

終戦直後、文部省が戦時色を払拭するために、学校における体育の教材から除外し、これまでその実施を中止してまいりました柔道は、その後文部省において、各種の資料にもとづき研究の結果、現在の柔道は、完全に民主的スポーツとしての性格、内容をそなえ、その組織も民主的に運営された健全に発達しつつあってもはや過去のような軍国主義との連関性に置いて取り扱われる懸念がなくなりましたので、学校スポーツの一教材として実施することはさしつかえないとの結論に達しました

このように新たな柔道は民主的なスポーツとして復活を果たした。剣道も同じようにスポーツとして強調されたが、新たな競技形態として、新しい競技を生み出した。剣道が、新しい競技を生み出した背景には、中野が指摘するように「昭和二十二年三月、極東委員会（The Committee for East）から出された『日本教育制度改革に関する指令』」の条文に「『例えば剣道のごとき精神教育を助長する古典的スポーツ』の言葉が」示めされ「剣道と言う文字をなくさない限り、いかに剣道の内容を変えてスポーツにしてみても『剣道』と

いう名称では」復活は不可能であった。その為、「剣道の復活を日本独立するまで待つか、あるいは一步前進して新しいものを生み出すかについて種々討論が行われた。その結果、“従来の剣道”は他日を期することにして別に剣道の長所をとり、他のスポーツを参考にして、青少年の安全と、当時の経済事情を考慮に入れて新たに考えたがしない競技であった」¹²⁾。しない競技は昭和27年に学校教材として復活を遂げ、翌年に剣道が復活した。剣道の復活に際して文部省は以下のことを示した¹³⁾。

終戦直後、文部省は剣道を学校体育の内容から除外し、かつ学校内における実施を中止してきました。その後、剣道はスポーツとして新しい内容を備えるに至りましたので、いろいろな角度から研究した結果、高等学校以上の実施可能な学校においては、これを行つてよいと考えるにいたりました

これらの「武道」の復活について高橋は「かつての武士道や日本精神のような精神的価値を重視したからではなく、むしろ、他の外来スポーツと同じものであると認めたからである」¹⁴⁾と述べているように、戦後の「武道」は、柔道・剣道も学校体育の基本方針にそって民主的スポーツとして復活を遂げたのであった。

Ⅲ. 「格技」という新たな領域名称と「格技」の拡大

昭和33年改訂「中学校学習指導要領」と昭和35年改訂「高等学校学習指導要領」に「格技」という新たな領域名称が示された。「格技」の領域は、すもう・柔道・剣道が示され、男子のみ各学年一種目行われることになった。

「格技」とは、「combative sportsの訳語・格闘技を縮めた言葉で、戦後に我が国がモデルとしたアメリカの学校体育の運動分類の一つである」¹⁵⁾。

また、「『直接に相手の身体を攻撃することを競い合う対人的な運動』であって、すもう・柔道・剣道・なぎなた・フェンシング・レスリングなどを総括した」¹⁶⁾ものである。一方、「武道という場合は柔・剣・弓道・なぎなたなどをさすので、その運動の発生的・歴史的な名称」¹⁷⁾である。昭和33年以降の学習指導要領では、柔道や剣道などは「格技」という新たな領域で示され、学校体育に位置付いた。それには、スポーツとして復活を遂げたことが影響したと思われる。学習指導要領の中で「格技」という領域が示されたことは、重要な意味があった。それには、野村が指摘するように「武道が再び重視されてくるのは、『格技』という名称がはじめて使用された昭和33年(1958)の中学校学習指導要領の改訂」からであるとし、この学習指導要領から「『道徳の時間』が創設されたことから明らかなように、学校教育全体が『徳育重視』の方針を打ち出していたのであり、『格技』の重視もその一環とみるのが自然である」¹⁸⁾と述べているように、「格技」は、徳育の影響によって重視されたと考えられる。

さらに「格技」は体育の中で拡大の方向に向かう。昭和44年改訂『中学校学習指導要領』の目標に「体力の向上」が示され、「格技」の時間数の割合が増えるからである。文部省の『中学校指導書保健体育編』は、目標に「生徒の健康の保持増進と体力の向上について強調すること」とし、格技には「いっそう指導の効果があるようにすること」¹⁹⁾が示されている。また、「格技指導の充実」ということについて以下のように述べられている²⁰⁾。

従前、格技では、すもう、柔道、剣道の3種目のうちから1種目を選択して、年間全体の授業時数の5～10%の時数で指導することになっていた。この割合では、中学校ではじめて取り扱う柔道や剣道については、指導の効果があげにくいので、授業時数の割合を10～20%に改め、格技指導の充実を図った

「格技」の授業時数の拡大は、このように説明された。しかし、荒木は「格技」の重視について「他の運動領域が、体操を除き全体的に減少の傾向にあるのに、格技の領域だけが二倍強という異常な増加を示したことは、内容の精選がなにをねらい、なんのためになされたのか考えてみる必要」²¹⁾があることを指摘している。つまり、「格技」の授業時数の拡大は、体育の目標とする「体力づくり」などの関連から考えると不自然な拡大であった。しかし、野村が指摘した「徳育重視」の方向性からは「道徳」との関係で「公正、規則の遵守、責任、協力などは、スポーツ活動において欠くことのできない態度」²²⁾が体育との関連で述べられているように、このことが「格技」のねらいである「礼儀正しく行ない、勝敗に対して公正な態度をとる」²³⁾などと結びつけられたのだろう。つまり、「格技」の授業時数の拡大は体育の目標から考えると不自然ではあったが、道徳との関係から「徳育重視」が「格技」の授業時数の拡大に影響したと言えよう。それには、柔道や剣道の授業を通じて礼儀作法などの徳育に期待されたのだろう。

Ⅳ. 「格技」(スポーツ) から「武道」(伝統文化)

平成元年改訂「中学校学習指導要領」と「高等学校学習指導要領」では、「格技」から「武道」へと領域名称が変更された。それには、昭和62年12月に教育課程審議会から文部大臣に答申され、それを踏まえて作成された教育課程の基準の改善のねらいに示された「国際理解を深め、我が国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視すること」²⁴⁾が影響した。「武道」は、「我が国固有の文化としての特性を生かした指導が行われるよう、『格技』の名称を『武道』に改めるとともに、態度の内容に『伝統的な行動の仕方に留意すること』」²⁵⁾が示された。

「格技」から「武道」の名称変更について松田

は「武道という名称が一般化しているし、国際的にも柔道・剣道という名称で行われる」とし「日本固有の文化の尊重という面がある」²⁶⁾と述べている。また、杉山は「武道はスポーツの一つである」としながら「日本的なものの考え方、行動の仕方が織り込まれて」おり、「格技という名称でもいいけれども、単なるスポーツではなくて、自分自身を高めるという考え方を大事にした日本文化であるというところを特徴とするためには、武道として出すほうがいいだろう」²⁷⁾と述べている。つまり、「格技」から「武道」という名称変更には、日本文化であるということを強調することにねらいがあった。それには、先述した「我が国の文化と伝統を尊重する態度」という社会全体の流れが影響したが、それ以外にも武道議員連盟などの政治的な後押しも指摘されている²⁸⁾。

「格技」から「武道」の名称変更は、単に領域名称が変更されたという安易な問題ではない。「武道」が、中学校・高等学校「学習指導要領」の中で「伝統文化」として重要な位置づけがなされたのである。戦後、「格技」は、他の種目と同じようにスポーツであることを強調した。しかし、新たに「武道」という領域名称が使われたことにより「伝統文化」という新たに特別な価値を有したのである。岸野は「格技」から「武道への改称は、ある意味では過去への歴史的反省を介しての、日本の伝統文化への確認に通ずる問題であった」とし、「戦前的武道への逆戻りを意味する」²⁹⁾わけではないことを述べている。「格技」から「武道」における領域名称の変更は「伝統文化」が強調されたが、戦前への回帰を意味したわけではなく「武道への新しい課題と将来への期待がかけられての再出発であった」³⁰⁾。しかし、この点をはき違えると木村が指摘しているように「わが国固有の文化の強調が神秘主義や独善に陥る」³¹⁾ことになりかねず、それは厳に避けなければならないことである。

「武道」という領域名称に変わっても松田や杉山は、スポーツであることを強調しているが、「格

技」とは異なり「伝統文化」に比重がおかれたことは否定できないだろう。平成10年改訂の『中学校学習指導要領解説』では、「我が国固有の文化として伝統的な行動の仕方が重視される運動」や「武道に対する伝統的な考え方を理解し、それに基づく行動の仕方を身に付けることが大切である」³²⁾ というようなことが示されていることからもうかがえる。このように、武道という領域名称が、「学習指導要領」の中で位置付いたことによって、体育における武道の価値は新たに「伝統文化」へと変化した。それが、さらに改正された教育基本法の「伝統と文化を尊重し、これらを育んできた郷土を愛する」³³⁾ ことと結びつき、平成20年に改訂「中学校学習指導要領」において武道が必修化された。このように、武道という領域名称が、「学習指導要領」の中で位置付いたことによって、体育における武道の価値は新たに「伝統文化」へと変化した。そうしたことで、「武道」は体育としてだけでなく、「伝統文化」として位置づけられ、必修化へとつながったのである。

V. ま と め

戦後、柔道・剣道などの「武道」はスポーツとして強調されたことにより学校体育に復活をとげた。昭和33年改訂の「中学校学習指導要領」では、「格技」という新たな領域名称によって、体育の中に位置付けられた。「格技」という領域名称を得たことにより、「格技」は「徳育主義」などと結びつき授業時数の拡大の方向へと進んだ。その後、社会情勢が変化していく中で、「伝統文化」などが強調されるにつれ、平成元年には改訂された中学校・高等学校「学習指導要領」では「格技」から「武道」へと領域名称が変更された。そこでは、領域名称が変更されただけでなく、戦後スポーツとして強調された「格技」は新たに「伝統文化」として「武道」が中学校・高等学校の「学習指導要領」に位置づけられ、「伝統文化」としての価値を持ったのであった。さらに、「武道」は、

教育基本法の改正によって示された「伝統文化の尊重」「郷土を愛する」といったことと結びつけられ、中学校の必修化へとつながったのである。戦後、柔道や剣道などの武道は、スポーツから出発し「格技」という新たな領域名称によって少しずつ拡大し「伝統文化」の強調により「武道」という領域名称へと変更し、中学校において必修化した。

注記及び引用参考文献

- 1) 渡邊彰「新学習指導要領に対する現場の質問7つ」, 『体育科教育』56巻6号, 大修館書店, p.25, 2008.
- 2) 注1) に同じ.
- 3) 石田智巳「新学習指導要領への期待とその体制がもたらす不安」, 『体育科教育』56巻6号, 大修館書店, p.45, 2008.
- 4) 注3) に同じ.
- 5) 柴田一浩「『ダンスと武道の必修化』で直面する課題をどう解決するか」, 『体育科教育』, 56巻6号, 大修館, p.41, 2008.
- 6) 注3) に同じ.
- 7) 注3) に同じ.
- 8) 文部省『文部時報』, 828号, pp31-32, 1946.
- 9) 前川峯雄「戦後十年学習指導要領の改訂をめぐって」, 『体育科教育』第5巻8号, 大修館書店, p.52, 1957.
- 10) 山本礼子『米国対日占領政策と武道教育』, 日本図書センター, pp.67-68, 2003.
- 11) 大瀧忠夫, 松本芳三, 小川長治郎『学校柔道』, 不昧堂書店, p.57, 1951.
- 12) 中野八十二「中学校剣道の諸問題」, 『体育科教育』第5巻8号, 大修館書店, p.13, 1957.
- 13) 全日本剣道連盟編『学校剣道―指導の手びき解説―』, 新剣道社, pp.311-312, 1953.
- 14) 高橋建夫「新体育の確立」, 前川峯雄編『戦後学校体育の研究』, 不昧堂出版, p.137, 1973.
- 15) 志々田文明「武道をめぐって―スポーツ・格技から武道への問題点」, 『体育科教育』第35巻1号, 大修館書店, p.29, 1987.
- 16) 川村英男「格技教材の変遷と検討」, 『体育科教育』第17巻2号, 大修館書店, p.5, 1969.
- 17) 注16) に同じ.
- 18) 野村英幸他「学習指導要領の動向から見た今後の武道指導に関する私論」, 日本武道学会『武道学研究』第34巻第3号, 2002, p.14.
- 19) 文部省『中学校体育指導書保健体育編』, 東山書房,

p.2, 1970.

- 20) 注19) に同じ p.5.
- 21) 荒木豊「なぜ格技は重視されたのか」, 『体育科教育』 第17巻6号, 大修館書店, p.23, 1969.
- 22) 注19) に同じ p.11.
- 23) 注19) に同じ p.77.
- 24) 文部省『中学校指導書保健体育編』, 大日本図書, p.1, 1989.
- 25) 注24) に同じ p.6.
- 26) 松田岩男「学校体育はどう変わるか」, 第35巻1号, 大修館書店, p.20, 1987.
- 27) 杉山重利「体育で何が、どう、なぜ変わったか」, 『体育科教育』 第37巻6号, 大修館書店, p.24, 1989.
- 28) 坂上康博「^ゝ格技、から^ゝ武道、へ—その背景にあるもの—」, 教育科学研究会編『教育』第479, 国土社, pp.121-122, 1987.
- 29) 岸野雄三「『格技』から『武道』の時代へ」, 『体育科教育』第41巻13号, 大修館書店, p.9, 1993.
- 30) 注29) に同じ.
- 31) 木村吉次「あらためて武道の教育的価値を考える」, 『体育科教育』第35巻7号, 大修館書店, p.17, 1987.
- 32) 文部科学省『中学校学習指導要領解説—保健体育編—』, 東山書房, pp.55-56, 1999.
- 33) 注5) に同じ.